

光と影の交錯した世界史の下で、二十世紀も終末に近付いています。戦争と革命、技術文明の発達と環境破壊の構図でありました。世紀的に考えると、環境問題は人間を含むすべての生物の存亡にかかわる大きな問題であります。進行する地球規模の環境悪化の中では、エネルギー問題と温暖化防止、ダイオキシン対策、酸性雨や産業廃棄物対策などの取組みがはじまっています。しかし、現代文明そのものが環境問題であり、はきちがえられた自由と止めどもない便利さと快楽を求める現代の人々、利己主義や功利主義に基づく農薬や除草剤等の化学物質の使用、大量生産、大量消費の現在の文明の在り方を考え直さなければならぬ時期にきています。最近、私達をとりまく環境問題についての関心と意識が高まり、ホタルやトンボが棲めるビオトープとかエコロジカルな自然という言葉を聞くようになりました。ビオトープとエコロジカルについて簡単にのべます。

ビオトープとエコロジカルな自然観

新潟県山野草をたずねる会
会長 小日向 孝

★ ビオトープとは
Bio=ビオ：英名バイオは生物を表す接頭語で、TOPoS=トポスは場所を表すことばとして用いられます。すなわち Bio+Topo=ビオトープとは、生物の生息空間を意味しています。これまでの緑化運動や植林方法にみられた、人々の管理主義と利己主義や産業主義を改め、「人間がいて自然がある」のではなく、「自然の中の人間」であるという基本に立つことが大切です。いろいろな生物が生活するためには食料、水、住居が必要であり、池や沼、草原、ブナ、コナラ、シイ、タブノキ、ケヤキ、シラビソ等の地域固有のあるさとの森林が不可欠です。そこには、生存競争や食物連鎖共存、我慢があります。こうした地域固有の綠豊かな自然を積極的に残し回復させて、いろいろな野生生物の生息可能な生態系が機能する空間を保障し、人々と共に共生、共栄するというバランスのとれた地域や地球の自然環境づくりが望まれるのです。

新潟県山野草をたずねる会機関紙
第13号
会員数93名(12/5現)
事務局
長岡市下条町1406-6
印 刷
(有)佐藤印刷所
TEL 32-0681



★ エコロジカルとは
水、空気、太陽エネルギー、多様な生き物、表土などの構成要素がうまく相互に結びつき有機的に構成された自然の一つのシステムをエコシステムと呼んでいます。自然といふものは土壤中の微生物をはじめ、いろいろな動植物、水、空気、太陽エネルギーなどによって構成されています。その土地本来の多様性を持っていない単調な「自然」は本物の「自然」ではないのです。私達にとって必要なことは持続可能な地域固有の本物の綠豊かな自然環境の実現であります。本当の自然観は、県内はもちろん国や地球規模において自然の中の一部分だけを保護しようという考え方の自然観ではなく、多様性と地域特性を持つ「自然」を全体としてまるごととらえる自然観です。これがエコロジカルな自然観です。

”宮脇昭先生を囲む会”を開催

山野草をたずねる会の顧問の宮脇昭先生を囲む会が八月二十一日（金）にかも川本館に於て行われました。

この会は宮脇先生が小出中学校PTA主催の文化講演においてになつた機会にご指導いたいたものです。正午から午後二時まで昼食会を兼ねてご指導をいただきました。その後、馬高・三十稻場遺跡「縄文の森」づくり予定地および国営越後丘陵公園の現地視察をして散会しました。

宮脇先生からは世界の緑の環境の現況をはじめ、本会の活動、縄文の森づくりの基本について御指導をいただきました。



森の観察ハンドブック

「生命の森」完売御礼

完売が心配されておりました「生命の森」が、会員の皆様はじめ、新潟日報社、長岡ケーブルTV、教頭会等多くの方々の御協力により完売できました。ここに謹んで厚く御礼申し上げます。会の理念が多くの人々に理解され、仲間が増え、森との共生、共栄していくビオトープ自然観やエコロジカルな自然観に立つ人々の行動や実践化を期待しています。

秋の南ドイツの山歩き

今井アイ子

南ドイツ、バイエルン地方フェッロング市郊外の湖畔、森の周辺を少し歩いて来た。

ドイツもアルプスに近い所は、秋のブナ・カラマツなど赤い紅葉ではなく黄色の紅葉だ。常緑の森と透明な水を湛えた湖、あちこち点在する池などどこを撮っても絵になる風景だ。厚い落葉のジュータンを踏みしめながら、昔の娘四人と歩いた。立止つては感激し、歩いて遠く眺め見入つて、ずっと歩き続けたい気持ちだ。四五キロでオーストリアに辿りつく国境地点。

ドイツの森林は国土の三分の一を占めるとか。深々と黒々と、入つたら出てこれなくなることもあると言われた。歩くことの好きな国民らしくすれ違う人々との挨拶など媚らず、すつきりとしていて感度良好に写つた。親切な案内板など要所には、しっかりと手が掛けられている。他の国人の人間にも判りやすくやさしい。登山口付近の歩道にまゆみの赤い実を見つけた時は、懐かしくうれしかった。植物の顔も姿も生活態度も違いはあるけれど、人の心は大部分で共通したものがあると、秋の落葉の山道を歩きながら痛感した。

南ドイツ大好きな気持が一段と深まつ

一見て歩いて感動した国内外の森一

た。再度行きたい国のナンバーワンはドイツだ。

山野草を訪ねる会に入会して

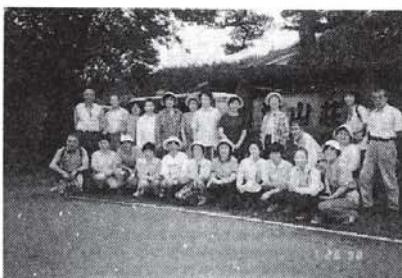
田島与志恵

私は、昨年の春に山野草の会に入会させて戴きました。この会に入会して嬉しい事が沢山ありました。

一つめは、一泊二日の夏の研修旅行です。昨年は会津、今年は赤城山と、どちらも素敵でした。行けども行けども続くブナ林を三時間たっぷりと森林浴をして歩いた事！可憐な花をみんなが眺め、野山を歩けば足元の草や花に目をやり、先生から教えて戴いて覚えたばかりの花や樹に出会うと「あ！これだ」と嬉しくなってしまいます。そして

ぶりとつかり、美しい景色を眺め、おいしい空気を吸い、野鳥のさえずりを聴きその上小日向先生からは、森の話、樹々の様子、花の名前等教えて戴き、一大家族のような仲良しの皆さんと、ワイワイ言いながら青空の下でお弁当を食べるのです。そして大自然の中にどつて自然がぐんと身近に感じられ、まだ知らない未知の世界に夢が広がっています。今、環境問題が取りあげられていますが、私達がまず自然と仲良しになつて相手の様子を知る事が、第一歩ではないかと思います。

三つめは、この会に入会して、お友達が沢山出来た事です。これからも、よろしくお願ひ致します。



－平成10年度活動報告－ ★テーマ 植物の生きざまに学ぶ

1. 早春の山野草を訪ねる会兼総会
 - ・方面 西山・寺泊方面
 - ・期日 3月29日（日）
2. 春の野を歩き山菜を食べる会
 - ・方面 東山方面
 - ・期日 4月26日（日）
3. みどりを育てる会
 - ① 樹木種子の播種 4月26日（日）
アカガシ、ウラジロガシをポットに播種し参加者全員が育苗
 - ② 実践例の会
 - ・5月9日（土）・10日（日）長岡リリックホール
日本ホリスティック教育協会教育セミナーで川崎の森
平和の森・江陽の森・与板の森づくりについて会長が発表
 - ③ 樹木の植栽
 - ・9月26日（土）宮原神社奉植 シラカシ、スダジイ
 - ・10月4日（日）下条神社 ウラジロガシ、シロダモ、シラカシ
 - 4. 夏の植物観察会兼合宿研修
 - ・方面 玉原湿原方面
 - ・期日 7月25日（土）～26日（日）
 - 5. 宮脇昭先生を囲む会
 - ・かも川本館、馬高・三十稻場遺跡、国営越後丘陵公園
 - ・8月21日（金）
 - 6. シンポジウム・にいがた「緑」の百年物語に参加（5名）
 - 7. 秋の野に学ぶ（キノコの識別・同定及び木の実・草の実育てる会）
 - ① 方面 柏崎きのこ園
期日 9月26日（土）
 - ② 方面 野々海方面
期日 10月4日（日）
 - 8. 学び合う会（山野草を語り活動を反省する会兼忘年会・総会）
 - ・場所 寿司川（長岡市幸町1-11-2）
 - ・期日 12月5日（土）
 - 9. 機関紙13号の発行
 - ・12月5日（土）



十五周年記念式典

十五周年記念式典に 参加して

木曾 誠子

平成九年十一月二十二日、アトリウム長岡で、十五周年記念式典が行われた。その日は私にとって、忘れ難いものとなつた。

会長から、十五周年記念式典及び祝賀会開催について提案されたとき、いつの間にか十五年もたつたのだということを知り、いろいろなことが懐かしく思い出された。「この十五年間に多く思つたこと」を強く語られた。その会員の出入りがあった事。初めての頃の夏の合宿研修は登山中心で厳しかつたが印象深い事。移動も今はマイクロバスで全員一緒に事が多く、当初は自家用車数台だったので、途中ではぐれてしまい探し合つた事。活動内容も自然の恵を受けるだけでなく、本物のみどりの旧復としての植樹の活動も少しずつ加わってきていた事など……。

五十名の他に、約三十名の来賓及び旧会員が参加してくださいました。宮脇先生は「植物社会では肥沃で適温・適湿という良い環境の立地では競争が激しくなるので、多くの植物は最

も適した生活域より少しづれた立地で生活をしていること。人間社会もそういう植物の生き方に学んで、少し我慢しあいながら生活することが幸せにならぬのではないか。自然破壊が進む現在だからこそ、よりいっそう植物の恩恵を知り、人間は植物と共に生存していくことが大切であることを強調された。

日本はもとより世界各地の植物を調査し、森の再生に精力的に活動しておられる宮脇先生のお話に感動したり、懐かしい人々との語らいで、「生命の森」作成や記念式典準備の苦労も吹き飛び、快い疲れで一日を終える事ができました。

「生命の森」

—表紙に込められた思い—
小幡 和雄

今日は「生命の森」編集の秘話といふことで、表紙に的を絞つて語つてみます。

かなり本の内容もできかかった頃、題名を決めないと仕事が進まないことが分かり、題名のアイデアを出してもらいました。その中で有力だったのが、「植物の生きざまに学ぶ」と「森は生命」でした。この二つについていろいろ

ろ討論を重ね、「森は生命」の意味が我々が考えたことと少し違うことに気付き、逆にして「生命の森」という言葉を生み出したのです。最初は少し違和感があつたのですが、不思議なことに何回か言つて、うちに皆で「これがいい」ということになつたのです。（題名の解説は本書で）

また、写真はもっと大騒ぎでした。私は、長岡を見渡せる鋸山の山頂から写真を載せたいと思ってやつと晴れた十一月二日に登つて撮つたのですが、つまらない写真になつてしましました。それから金子さんに頼んでいろいろな角度の山の写真をお願いしました。印刷屋からはもう期限が限度だと言われあせりました。金子さんが御苦労して撮つてくださった写真を並べ、さらにたくさん写真の束を何気なく見ていたら、鮮やかな新緑のブナ林の写真が目に飛び込んできました。「これだ!」と思いました。木曾さんが撮つた早春の真木のブナ林の写真でした。あとは急いで表紙の色と文字デザインを決めて印刷屋へ。本当のぎりぎりセーフでした。

十五周年記念式典次第

- 一、開式のことば
二、会長挨拶

新潟県山野草をたずねる会会長 小日向 孝

三、祝辞

日本ホリスティック教育協会会長 山之内義一郎様

前長岡市市長公室長 東山山草会 田中 熟様
金子孝平様

四、閉式のことば

来賓紹介ならびに祝電披露

演題「ふるさとの森づくり」
講師 国際生態学会会長 田中 熟様
記念写真撮影 宮脇 昭先生

五、休憩

記念写真撮影

演題「ふるさとの森づくり」
講師 国際生態学会会長 田中 熟様
記念写真撮影 宮脇 昭先生

六、開会

お祝いのことば

前江陽中学校長 長岡市議会議員 小熊正志様

七、出版祝賀会次第

品田博道

佐久間昭夫様

八、祝宴

祝いの舞及び謡曲 余興（ビデオ上映）

佐川 正英様

九、乾杯

青野正英様

十、閉会

佐川 通様



七、閉会

佐川 通様

小幡 和雄

早春の西山

春の山野草に参加して

永井 マス

今年は春から天候が不順で、三月二十九日も雨が降って寒いのではないかと思つておりましたが、朝からたいへん良い天気に恵まれ、楽しく参加することができました。

曾地でウラジロガシを観察し、まだ寒くてまわりの木や草たちは芽も吹いていないのに、この木は成育していく力強さを感じました。

安産の神様で知られる胞姫神社へ行き、タブの自然林も観察しました。遠くから見ても赤色が印象的な山椿がとてもきれいに咲いていました。

歩き回つてちょうどお腹がすいた頃まで見て来たところは、スマソウの群落の中に、キクザキイチゲや



加して、いろいろな人と知り合い、山野草を愛し続けたいと思います。

雑木林の圧巻

八子 貞夫

「覚える気がないので、木のことはほとんど分かりません。この会では木のことを教えてくださるとの事で入会しました。」と挨拶した処、散会時に、「感想文を書け」という大当たり。どこにも新入社員イメージはあるものだと実感した次第です。

早春の会は、これでもか、これでもかと、息つく暇もないようなハードな日程で、息切れしそうな行程でした。西山町の石部神社の裏山に分け入った時は、圧巻というしかありませんでした。

ソウの群落の中に、キクザキイチゲや

力タクリがボツボツあるが、時期がそれぞれ若干ことなって咲いていた、というのが実感でした。

ところが、この神社の裏山では、三者が一齊に咲き、「これ見てくれ」といわぬばかりに奸を競つて咲き乱れていました。

息を飲む美しさ、言葉もない程の感動を覚えたものです。

上には、まだ延々として群落は続いているようですが、踏みつけてしまいそうなので、途中でリタイヤしてしまいました。

この感想文を書きながら、三つの花の群落が、再び目の前にうかびあがり最近になり、すばらしい研修旅行であったと再度感激しています。

小日向会長さんはじめ、会員の皆様に、感謝申し上げる次第です。

真木のブナ林

吉井 京子

春の研修会で、再び真木のブナ林を訪ねることができた。前回は晴天のブナ林、今回は雨の中のブナ林だった。私は、みんなより、一足早くブナ林に着いた。もやの中にすくと立つているブナ林を見た時、莊嚴さというか、神々しさに林の中に入っていくのが、ためらわれる気持ちがした。これは、私だけではなく、印象深い忘れられない自然景観だったと帰りの車の中でも話題になつた。



片貝地区でも、ブナ林を育てたいと植林を始めた。はたしてブナは育つのだろうか。三十センチ以上の腐葉土がないと育てるのが難しいと先生から聞いたけど、無理かも知らないね。」と車の中で片貝の方と話し合つた。

私は、この会に入会しなければ、ブナ林が四季それぞれに個性があり、美しく魅惑的であることも知らないで過ぎたのではと思う。生まれた人が一生を終えるころの群落が、再び目の前にうかびあがり最近になり、すばらしい研修旅行であつたと再度感激しています。

小日向会長さんはじめ、会員の皆様に、感謝申し上げる次第です。

ブナを守り育てて、いろいろなことをブナから学ばせてもらいたい。

今、想うこと

一九五六年の ゼンマイ時計

永井『蝶太郎』道雄

平成10年12月5日

昭和三十年代、信濃川右岸の木道タソク近くの川原では、川原のあちこちに伏流水の湧水が見られた。アユやカジカやアカザをつかまえ、土手にはジャコウアゲハの大群やヒオドシチヨウが乱舞し、中州ではヒラタクワガタなど当たり前のようにいた。母が買ってくれたファーブル昆虫記が重なり、感動する心は、自分が生きていること虫たちの命の重さに、人間の心の深い所で気付き考え、自然豊かな時を過した。

自然を守る意味は、環境財・物質的財産・精神的財産・文化文明の源として非常に重大であるが、高度経済成長を過ぎて、生態系のゆがみが地球規模で問題になった。リオ宣言の中でも生物多様性条約が謳われ、人間活動の持続可能な開発について『人々の生活の質的改善を、その生活基盤となっている各生態系の収容能力の限度内で生活しつつ達成する事』を定義した。将来世代に財産を継承していく事は、デザイナーとして環境アセスメントに携わり造園をビオトープシステムで実践する事につながってきた。ふるさとの川や森は、今も私の胸の中に生き続けてい

る。我が心に生きている先人達の想いを育くみ、新たに出会った多くの人達と協力し行動しようと己の魂に刻む。限りある命—ゼンマイ時計は、自然保护は自然介護と念じ、時を刻む。

旬の本「生命の森」 を読んで

太田 修

小日向先生たちの本ができるという。先生との思い出は、関原中学校二年の頃、地学の先生として現れた色黒い、近眼で、ナマリの激しいやせ細った人との出会いであった。先生、新任のくせして夏休みに森の研究をするから「自然科学研究グループ」をつくる、参加したい者は手を挙げろ。それだけで、二十人ぐらい集まつたから不思議と言えば不思議、先生も変わっていたが、生徒も純情で馬鹿だったかもしれない。ところが、このグループ、朝早くから自転車で中永トンネルまで行き、それから小木ノ城まで登り、ひもを四隅に張つて群落調査、土壤調査、一ヵ月穴を掘つてそれぞれの土を学校に持ち帰つて、PH調査（それで先生のアダ名は、ペーハーとなつた）。植物のスケッチや押し草、……ともかく、夏休みの間中、雨が降ろうが風が吹こうが、小木ノ城通いをしたという貴重な経験を与えて下さった先生である。

結果、秋の科学研究発表会では残念

ながら二位であった。その講評は私は今でも覚えている。「中学生らしからぬ大規模で労力のいる研究であるが、長岡市は工業都市であるから、植物や森林の研究は次点とし、つる巻バネの研究を一位とする。この方が中学生らしい、好感がもてる」。おいおい冗談じゃないぜ、夏休み一ヶ月はどうなるんだ、大雨に遭つて遭難しそうになつたんだぞ。中学生らしからぬとは何事だ。ペーハーのせいだ。

しかし、私たちは後味の悪いホロ苦い思い出とともに、先生から学んだ科学的な方法や自然や森への畏敬の念は今でも忘れてはいない。次のような文章の良さを今でも見つけ出せるのである。

「本物の自然（森）とはある地域が自然の状態にあるとき、本来生える植物集団を言います。その地域の潜在自然力に合致し、植物社会における擬の厳しさを克服して育つた植生の姿が『本物の自然』なのです。植生は、社会的（内因的）秩序規制と環境的（外因的）秩序規制によって成立し、その環境傾度による相乗作用の結果として表現されています。植生の見方や区分として人間の干渉がいつさい無い状態で成立している植生を原植生（自然植生）、人間の干涉が入った状態で成立している植生を二次植生（代償植生）に区分しています」。

昨年の十五周年記念行事のまとめや完売した「生命の森」の反響を載せて頂くことができ、編集部員一同感謝申し上げております。

今年は、天候不順がたたり、山菜を食べる会では、盛を過ぎ、きのこの会では二週間程早かつたため、収穫が少なく残年な年でした。

来年は、天候が回復するよう、祈つてやみません。

（小幡・木曾・金子・細川）

編集後記

「かしのみ十三号」ができました。今号は、感激も新たに感動を綴つていただこうと、各研修会毎に、その会で最も輝いていた方に、原稿を寄せせて頂くようお願いしました。まだ感動も醒めぬうちに興ざめな、と氣分を害された方がいらっしゃいましたら、お許しください。

お陰様で生き生きとした原稿を寄せて頂くことができ、編集部員一同感謝申し上げております。

今年は、天候不順がたたり、山菜を食べる会では、盛を過ぎ、きのこの会では二週間程早かつたため、収穫が少なく残年な年でした。

来年は、天候が回復するよう、祈つてやみません。